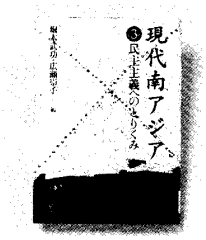
『現代南アジア③民主主義へのとりくみ』：206 ～ 207. 2002

書　　評

堀本　武功・広瀬　崇子編
『現代南アジア③民主主義へのとりくみ』

東京大学出版会　2002年　311ページ



原　　和世

本書は、文部省科学研究費特定領域研究「南アジアの構造変動とネットワーク」の成果として書かれた『現代南アジア』シリーズの第３巻である。2002年９月に第１巻が刊行され、現在（2002年11月）までに第３巻までが既に刊行されている。シリーズは全６巻にわたり、第１巻「地域研究への招待」、第２巻「経済自由化のゆくえ」、第３巻「民主主義へのとりくみ」、第４巻「開発と環境」、第５巻「社会・文化・ジェンダー」、第６巻「世界システムとネットワーク」に構成されている。このシリーズは、政治・経済といった従来の研究分野に加え、環境・ジェンダーなどの新しい分野を取り入れている。これは、南アジア研究としては日本国内で初の試みである。

ここでは第３巻（政治分野）について紹介したい。まず、本書の構成は次の通りである。

はじめに
第１部　国家の形成
第２部　民主政治の展開
第３部　国家運営のパフォーマンスと域外国家

南アジアとは、インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、ブータン、モルディブの７カ国を示す。本書は、この地域の中核であるインド、パキスタンの建国当初をおさえた上で、現代までを扱っている。

まず、第１部（国家の形成）で、英領インドから1947年８月15日インド、パキスタンとして分離独立するまでの過程、２国の国家形成における課題、インド憲法の役割、そして南アジア地域における民主政治の特徴とその問題点をあげている。独立後、どのようにこの地域が「国民国家」を作り上げてきたのか、その国家の枠組みはどのように設定されたのか（憲法）、民政と軍政の二分法をそのまま印パにあてはめてよいのか、そして南アジア諸国が採用したウェストミンスター型議会制民主主義の適合性の限界はいかなるものかなど、民主政治の課題が論じられている。ここは南アジア政治を概観する目的で書かれている。

次に、第２部（民主政治の展開）では、まず民主政治の条件である普通選挙について、南アジアの選挙政治の特色をあげている。そして、インドとパキスタンに焦点をあて、インドの分権化（パンチャーヤット制度の展開）、インド独特のカースト制度が政党政治に及ぼす影響が論じられている。さらにパキスタンにおいて政治的イデオロギーとして大きな役割を持つイスラームについて論じている。パキスタンでは、憲法に基づく国家が最も正統性をもつが、その国家が正統性を獲得するためにイスラームを利用し、それが国家の不安定な要素になることを述べている。ここにおいて、宗教・民族・カーストなど多くの複雑な要素をもつ南アジア地域の特殊性と民主主義や正統性などの普遍性を組合わせて

南アジア政治の特徴を論じていることが特筆すべき点である。しかし言語問題についても扱うべきであったのではないか。というのは、言語は、ナショナリズムの源であり、国民統合や選挙運動などにおいてコミュニケーションの絶対条件であり、さらに紛争までを引き起こす要因になりうるからだ。

そして、第３部（国家運営のパフォーマンスと域外国家）は、1999年10月に起こったムシャッラフ陸軍参謀長によるパキスタンでのクーデターを踏まえ、インドとパキスタンの軍事組織と政治の結びつき、パキスタンとバングラデシュの軍政の特徴について述べている。また、政治経済学の視点から、インド政治の利点と課題について分析している点も特筆しておきたい。最後に、域外国家との関係で、印米関係について書かれてあるが、域外国家をアメリカ１国についてのみ論じているのが残念である。アフガニスタンや中国といった南アジア地域と同一民族・宗教の諸国、国境を隔てた国々との関係について分析されていてもよかったのではないだろうか。また最終章は、「民主主義へのとりくみ」という本書のテーマとの結びつきが分かりにくい。

以上、述べてきたように、本書は、南アジア地域の政治を理解する上で、極めて高いレベルの総合的研究書であり、南アジアを研究する者以外にも必読されるべきものであると言える。